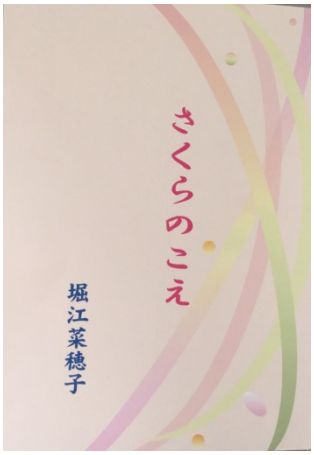
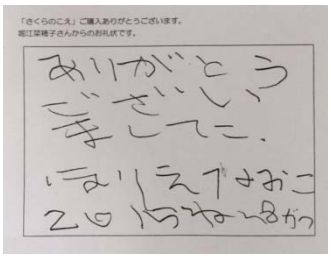
さくらのこえ

7 月 31 日レポートに書いたように、堀江菜穂子さんの詩集『さくらのこえ』を注文して手に入れた。ボランティアの佐藤昌子さんの編集により、シンプルであるが、読みやすい詩集に仕上がっている。「さくらのこえ」が聞こえてくるようだ。写真のような堀江さん直筆のお礼状も添えられていた。



堀江さんがわずかに動かせる手でつむいだ詩は約 1200 編という。その中から、はたちの誕生日前後の作品 51 編を集めた詩集である。詩集の末尾の「あとがきにかえて～はたちのひに」、なぜ堀江さんが詩を書くようになったかが書かれている。

「はたちのひ　わたしはいきていた
　うまれたときにおもいしょうがいをおってしまい
　わたしは　はたちまでいきられないだろうといわれていた」
から始まる。



大きくなるにつれ、自分が人とは違うことに気がつき始めた。ほかの子どもたちが当たり前にできていることが、自分には何ひとつできなかったからだ。

私は自分と家族を恨んだ。どうして自分ばかりがこんな身体なのだろう。そればかり思っていた。私の心はそのことで一杯になり、そして中学生の頃ばらばらにくだけた。

どうにもできない日がつづいた。ある日、障がい者の人の書いた詩が歌になり、人々に広まっているニュースを耳にする。これだと思った。詩を書くにつれ、張り裂けそうな心が解放されていった。そして最後に

「しは　わたしがいまのわたしになるためのたいせつなとおりみちだった
　しをかくことはわたしじしんを
　かいほうするこういだった
　わたしのしをよむすべての人たちに
　わたしがたちなおったように
　あきらめずにいきてもらいたい」とある。

この詩集を京ちゃんも熱心に読んでいるという。京ちゃんも詩を書くなどして、自分の気持ちを表現してほしい。堀江さんの詩集「さくらのこえ」を読みながら、京ちゃんの声が聞こえてくるようであった。

（2015 年 8 月 24 日）